大東文化大学紀要四十六号

『おくのほそ道』考（二）

A Study of "Okunohosomichi" (2)

萩原恭男
Yasuo HAGIWARA

本稿は、『おくのほそ道』の従来の紀行文にはない新しみを検討した前稿「『おくのほそ道』考」（大東文化大学紀要・第四十五号）に引き続き、考察を進めるものである。

前稿では、構成上の新しみとして、以下のことを明らかにした。

○　章と章との対比

「室の八島」の縁起を語る曽良は、神道に造詣の深い人物であり、次章の「仏五左衛門」は、正直だけが取り得の無智無分別な宿の主人である。両者が対比されて、それぞれの人物が強く印象づけられる。

「石巻」の現在の繁栄と「平泉」の過去の栄華を対比して、人の世の営みのはかなさを描く。

関守のきびしい取調べ、悪天候による足留め、さらに山賊に襲われるのでは、という「尿前」の旅の難儀は、「尾花沢」に出ると旧友の手厚いもてなしに我家に居るような気楽さに一変する。その日その日で新しい気分になるのが旅である。

○　人物を章の主題にしたこと

等躬（須賀川）・忠衡（塩釜）・等栽（等栽）・実盛（小松）・遊行上人（敦賀）

この他にも農夫・歌人・修験者など様々な人物が登場して、紀行文の流れに変化を与え、それぞれの章に風情を添えている。この人物の扱いが、

『おくのほそ道』の新しみである。

一五

前稿では、連続する二章について対比を考察した。本論ではまず、離れた章における対比を検討する。

○「松島」と「象潟」

「象潟」では、松島と比較した全体の印象を、

江の縦横一里ばかり、俤松島にかよひて、又異なり。松島は笑ふが如く、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはえて、地勢魂をなやますに似たり。

と述べている。「松島」の「江の中三里」に対し、「一里」であるから潟の広さは三分の一と狭い。実際の地形も、松島湾は楕円形に近く、東北東に長く約八キロ、幅は最大五キロの中に二六〇余島が浮ぶ多島海で、海岸線は二一キロに及んでいる。一方の象潟は、東西二キロ、南北約三キロの中に八〇余の島が点在し、入江状の多島潟であった。松島の太平洋に大きく開けた景観と、象潟の狭い潟の中に閉じこめられたような風景の違いを、美女の笑顔と愁い顔になぞらえて、その特色を的確に表現したのである。

芭蕉は、第一段において「松島」を日本一の好風景とたたえ、美人が化粧したような奥深い美しさは、天地創造の神がなさったことで、絵や文章では表現できないと結び、第二段では、感動のあまり眠れぬ夜を描いている。

「象潟」においては、まず酒田から象潟に到るまでの途中経過を書き、雨のため晴れるのを待って、翌日晴天の下、潟の中の名所旧跡をめぐり、干満寺からの眺望を楽しみ、結びに五句を配している。

「松島」は「江上に帰りて宿を求れば、窓をひらき二階を作て」とあるように、仙台の人々の遊覧地で旅籠も多く、ほとんどが二階造りになっていた。

一方、「象潟」のある塩越村は、天然の良港をもち商船・漁船の出入も多かった。漁業は鱈漁を中心に盛んで、芭蕉も「蜑の苫屋に膝をいれて」と書いている。松島と象潟は土地柄が全く相違していたのである。

「象潟」の文末には、

象潟や雨に西施がねぶの花
汐越や鶴はぎぬれて海涼し

祭礼

象潟や料理何くふ神祭　　曽良

蜑の家や戸板を敷て夕涼　　みの、国の商人低耳

岩上に雎鳩の巣を見る

波こえぬ契ありてやみさごの巣　　曽良

の五句が並記してあり、前文の主題を一句に集約して結ぶという形をとっていない。

五句を検討しよう。はじめの二句は、本文の雨のち晴の天候に対応し、次の神祭と夕涼みの二句はこの地方の暮しぶり、最後に景の句を配置してある。景から人事、そして景という構成である。ねぶの花・汐越（象潟の名所）・神祭（魚肉を禁忌とする熊野権現）・夕涼（海辺に雨戸を敷く）・雎鳩（象潟の名所雎鳩巌）、いずれもこの地ならではのものである。

本文にも、能因が三年間幽居したという島、西行の和歌に縁のある桜の老木、神功皇后の御陵などが記述されている。その土地の歴史的な背景に関心が強かった芭蕉にとって、様々な伝説に富む象潟から松島とは違った風情を感じとったのである。酒田から象潟への途次にある歌枕「うやむやの関」を、干満珠寺の眺望の中に描き出したのも、旧跡を重視したからである。

江の中に影を映ずる二千メートル余の鳥海山の景観も象潟ならではのすばらしさであった。出羽富士と呼ばれている山容は特に芭蕉の心をひきつけてやまなかった。六月一六日、象潟に到着すると、まっ先に象潟橋に出かけ「雨暮気色ヲ」見た。その折の心中は、

日影やゝかたぶく比、汐風真砂を吹上、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に莫作して「雨も又奇也」とせば、雨後の晴色又頼母敷と、蜑の苫屋に膝をいれて、雨の晴を待。

と描かれている。そして、芭蕉は象潟を離れる一八日、快晴の早朝、象潟橋まで行き、「鳥海山ノ晴嵐」を眺めて名残りを惜しんだ。

一六

対比とともに、構成上目立つのが、先の章で述べていることがらに、後の章で対応する照応である。

○「旅立」と「草加」

「旅立」の書出し「弥生も末の七日」とあって年次はない。これに応じているのが「草加」の冒頭「ことし元禄二とせにや」である。もし「元禄二年弥生末の七日」とすれば、日付を出して、その日の出来事を記す日並の紀行文の形になってしまうため、避けたのである。

また、「其日漸草加と云宿にたどり着にけり」（草加）は、「旅立」に「行春や鳥啼魚の目は泪　是を矢立の初として、行道なをすゝまず」とあるので、第二の故郷とも思っている江戸との別れがつらくて足どりも重く、その日やっとのことで千住の次の宿、草加にたどり着いたことが、納得できるのである。『旅日記』にある通り粕壁泊りとしたならば、「旅立」の主題である別離の悲しみなどは感じられない。千住から粕壁までは、六里二八町。ちなみに草加までは二里八町である。

○「那須」と「黒羽」

「那須の黒ばねと云所に知人あれば」（那須）の知人とは、「黒羽の館代浄坊寺何がし」（黒羽）のことである。「那須」の書出しにおいて「那須の黒羽の館代浄坊寺何がし」と書くと、「黒羽」で同じ名前をくり返すことになる。また、「知人の方に言信る」とすれば、続く「思ひがけぬあるじの悦び」の「あるじ」が不明となり、予想もしなかった芭蕉の訪問に大喜びしたという文脈が生きない。

○「黒羽」と「殺生石」

「玉藻の前の古墳」（黒羽）と「殺生石」は、九尾の狐の伝説で結びついている。伝説によると殷の紂王の寵妃妲己となり国を滅した妖狐が日本に渡来し、玉藻の前という美女となって現れ、鳥羽院を悩やました。陰陽師安倍泰成がこれを調伏したので、正体を現し、下野国那須原に逃げたが、勅命を受けた三浦之介・上総介によって射殺された。この狐の霊は化して殺生石となったという。なお両名は、狐を射るために犬を代りにして稽古したといい、これが犬追物の始まりとする伝承もある。黒羽町には犬追物跡と伝える場所があり、芭蕉も見学している。

また、「館代より馬にて送らる」（殺生石）には、浄法寺図書と弟桃翠の「朝夕勤とぶらひ、自の家にも伴ひて」とある手厚いもてなしの一端が現われている。

○「白川の関」と「須賀川」

心許なき日かず重るまゝに、白川の関にかゝりて旅心定りぬ。「いかで都へ」と便求しも断也。中にも此関は三関の一にして、風騒の人心をとゞむ。秋風を耳に殘し、紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙に、茨の花の咲そひて、雪にもこゆる心地ぞする。（白川の関）

すか川の駅に等窮といふものを尋て、四、五日とゞめらる。先「白河の関いかにこえつるや」と問。「長途のくるしみ、身心つかれ、且は風景に魂うばゝれ、懐旧に腸を断て、はかゞしう思ひめぐらさず。

風流の初やおくの田植うた（須賀川）

持病をかかえながら、ようやく陸奥の入口にたどり着いたとき、平兼盛が「便あらばいかで都へ告やらんけふ白河のせきはこえぬ」と詠んだ

心境に共感した芭蕉は「断也」と書いたのである。「後かげのみゆる迄はと」名残を惜しんでくれた江戸の知己・門弟たちに白河の関までは無事に到着したと、何としてでも知らせてやりたかったのである。名歌に詠まれた秋風が耳に響き、紅葉が一面に散り敷いた情景が彷彿として、眼前の青葉と重り合って深い味わいを覚え、さらに、あたりの卯の花・茨の花が芭蕉を、雪を詠じた古歌の世界に誘い込んだのである。そして、須賀川に到着すると等躬がまっ先に「白河の関では、どんな句をお詠みになりましたか」と問う。芭蕉は「長旅の疲れと風景に圧倒され、多くの歌人たちの感慨が身にしみて、句を案ずる余裕がありませんでした」と答えた。この二章を通じて芭蕉と等躬の風雅に対する篤い志がひしひしと感じられる。

○「越後路」と「一振」

「越後路」は、酒田から国境までの経過を短く記述したあと、

鼠の関をこゆれば、越後の地に歩行を改て、越中の国一ぶりの関に到る。此間九日、暑湿の労に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天河

とある。出羽との国境にある鼠の関から越中の一振に到着するのに九日を要し、暑さと雨のため心身ともに疲労し、持病が出て、その間を細かく書くことができなかったのである。一振は越後路のもっとも西の宿駅であるが、越中に入ったことを強調するため、あえて隣国とした。次の「一振」との関連もある。

結びの二句では、旅も七月に入ったこと、一振到着が七夕の日であったことを示している。

荒海である日本海の彼方に横たわる佐渡が島は、かつて「大罪朝敵」の人々が島流しになっていた所である。「荒海や」の句は、七夕の句であるとともに、紀行文全体の流れの中では、江戸から長旅の末、流人の島を目前にする地点にまで、はるばる来たものであるという芭蕉の感慨がこめられている。

「一振」の書出し

今日は親しらず・子しらず・犬もどり・駒返しなど云北国一の難所を越て、つかれ侍れば（後略）

は、先の「神をなやまし」に対応する表現で、疲れがひどく寝ようとするが、眠れないという余情がある。そして、聞くともなく新潟の遊女二人の身上話を聞くことになる。

天の河には、七夕の夜、牽牛星と織女星とがこの河を渡って、年に一度相会するという伝説がある。この二星の出合は、一つ旅籠に芭蕉と遊女

が泊合せたことにひびいている。この雰囲気・気分でつながるというのは、前句の余情に発想を得て付句を作る蕉風の句付に通じている。

○「旅立」と「大垣」

江戸での旅立には、知己・門人、その他親しくしている人々がすべて集まり、東北・北陸の長旅に出かける芭蕉を、後姿の見えなくなるまで見送り、別れを惜しんだ。芭蕉は離別の悲しみに涙を流している。

一方、「大垣」の章では、路通が江戸から敦賀まで出迎えに来て大垣まで同行。曽良は伊勢から、越人は名古屋から駆けつけた。地元の人たちは芭蕉が滞在した如行亭に前川・荊口親子その他親しい人々が、毎日のように訪れてその無事を喜んだ。芭蕉は、この二章を通じて、人生の喜怒哀楽が人々とのつながりの中にあることを示している。大垣で如行・前川らの名前を出したのは、士分の人達への敬意である。結びの句、

　　蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

は、大垣の人々との別れを惜しみながら、二見への新しい旅立を詠んでいる。「行秋ぞ」は旅立の

　　行春や鳥啼魚の目は泪

の「行春や」に照応させたのである。

人生の旅は、これからも続くという余韻をもったこの句は、『おくのほそ道』の結びとして申し分がない。

○「序章」「草加」と「松島」

芭蕉は、旅支度にもも引の破れをつくろい、笠の緒を付替えていると、「松島の月先心にかゝ」るのであった。ほかのことはさておいて、この度の陸奥の旅では、月光に照らし出された松島のすばらしい景色が、心から離れなかった（序章）。これに応じているのが「松島」の雄島の一節で、松の落葉や松笠の煙が立ちのぼっている草庵に、

　　先なつかしく立寄ほどに、月海にうつりて、昼のながめ又あらたむ。

と書いている。世俗を捨てた暮しに心ひかれているうちに、何時の間にか時が流れ、月影が海に映じて、昼とは全く異なった松島の景観が眺め渡されたのである。月下の松島について具体的には、一言もふれていない。すでに昼の松島の美しさについて、第一段で描いているため、読者が十分に想像できるからである。そのことよりも、宿の二階から眺めた折の心境を、

　　風雲の中に旅寝するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

と述べている。月の上った松島湾の黒々とした島影を見入っているうちに、その大自然の中に引きこまれてしまい、自然と自分とが一体となった、何とも表現のしようもない境地に入ったというのである。この状態は、「立石寺」の

佳景寂莫として心すみ行のみおぼゆ。

という心境と同じである。出発前、是非眺めたいものだと強く望んでいた月下の松島を前に「造化にしたがひ、造化にかへ」ったのである。感動のあまり眠ろうとしても寝ることができず、旅立の折に贈られた素堂・原安適・杉風や濁子の漢詩・和歌・発句を頭陀袋から取り出し、眠れぬ夜のなぐさめにしたと述べている。

ここで「草加」の「さりがたき餞」とは何であったのかが明らかにされたのである。兼好法師は、

ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむわざなる（『徒然草』第十三段）。

と書いている。芭蕉の場合は身近な知己・門人である。表現しようもない松島の美景について、あたかもそれらの人々が、かたわらに居るように、餞別吟に語りかけて一夜を明かしたことであろう。

この照応によって、それぞれの章は、独立した主題を持ちながら、直前の章、あるいは離れた章とのつながりが生じてくる。そのことが全体として一つのまとまりを感じさせるのである。

一つの章の中でも「日光」では冒頭の「卯月朔日」に、曽良の句「剃捨て黒髪山に衣更」の「衣更」が応じている。この二字には、旅立にあたり、僧体の師芭蕉の同伴者として似つかわしくと髪を剃って墨染に姿を変え、俗世界を捨てた決意がこめられている。これに対し芭蕉は、裏見の滝の裏側に入って、

暫時は滝に籠るや夏の初

と吟じ、自分にとってもこの度のみちのくの旅は、俳諧修行の行脚であると応じたのである。

さて、「室の八島」の神社の縁起、「仏五左衛門」の「仏」と呼ばれる人物、「日光」の東照宮讃仰、墨染に様を変えた曽良、裏見の滝の「夏安居」、これらは連句でいう神祇釈教である。つまり、神仏に関することが連続しているのである。これも広い意味で照応といってよいであろう。

右のように同じ気分でつながっている点では、「遊行柳」「白川の関」「須賀川」「あさか山」「しのぶ摺」の五章も同様である。

西行の「清水ながるゝ」の和歌にちなむ遊行柳で「田一枚」と吟じ、陸奥を代表する白川の関では多くの名歌に圧倒されて、句が詠めなかったと須賀川の風士等躬に答えている。「あさか山」では「あさかの沼の花かつみ」を日が暮れるまで探し廻り、「しのぶの里」では文字摺石を見て「早苗とる手もとや昔しのぶ摺」と吟じて、今は絶えてしまった草木染への強いあこがれを示している。

芭蕉は、旅の楽しみの一つに、「風情の人の実をうかがふ」ことをあげている。和歌の詠まれた現地に立って「古人の心を閲す」るのである。西行の「道の辺に清水流るる柳蔭しばしとてこそ立どまりつれ」にちなむ遊行柳、多くの名歌に色どられた白河の関が、まさにそれである。

もじ摺石を訪れた折は、今は全く行なわれなくなった「しのぶもぢ摺」を染め出す様子をどうしても見たいと痛切に思う。その気持ちは「五月乙女にしかた望んしのぶ摺」にはっきり詠まれている。この句は芭蕉の希望をそのまま句にしただけでなので、本文では推敲し「早苗とる手もとや昔しのぶ摺」の句形に改めている。田植をする早乙女たちのす早く器用な手つきを見ていると、しのぶ摺を染め出している手もとが自然に眼前に浮び上って来たのである。右のように「花かつみ」のありかを土地の人に問い、沼を捜すという具体的な行動に移すのが俳諧である。単なる歌語として先例にならって詠むだけの歌人との違いがそこにある。

一七

さて、『おくのほそ道』では、文章技法の一つ伏線を用いているのも新しみである。

「平泉」に「先高館にのぼれば」とある。芭蕉は、まっ先に義経の居館があったとされていた高館に登ったのである。『吾妻鏡』に収められている中尊寺の僧侶の文治五年（一一八九）の報告書によれば、平泉に高館の地名はなかった。芭蕉は近世前期に作られた「平泉古図」で高館の地名を知ったものと思われる。そこには、古い祠があったという伝承に基づいて、仙台藩主伊達綱村が天和三年（一六八三）に建立した義経堂もあった。義経最期の場所は、ここであると芭蕉が考えたのは当然である。

さて、「平泉」以前の章において義経にかかわる記事が六つの章に出ている。

まず、「黒羽」に

それより八幡宮に詣。与市扇の的を射し時、「別しては我国氏神正八まん」とちかひしも、此神社にて侍と聞ば、感応殊しきりに覚えらる。

の一節が見える。

与市は、下野国那須の住人、那須与市のことである。彼は源義経に従って活躍し、特に文治元年（一一八五）、屋島の戦では、平氏方の小舟に立てた扇の的を一矢で射落して敵味方の賞讃を浴び、弓の名手の名をなしたことは有名である。

「佐藤庄司が旧跡」には、

又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも二人の嫁がしるし、先哀也。女なれどもかひ〳〵しき名の世に聞えつる物かなと袂をぬらしぬ。

とある。「二人の嫁」とは、義経の家来となった佐藤庄司の二人の息子継信・忠信の妻のことである。文治三年（一一八七）、義経が奥州に落ち延びたとき、二人の妻女は、今は亡き夫の鎧・甲に身をかためて老母を慰めたという。この章では寺の什物「義経の太刀」もあげている。

続く「飯塚」では、「路縦横に踏で伊達の大木戸をこす」との記述がある。この「大木戸」は、文治五年八月の頼朝の奥州征伐に対し、藤原泰衡が構築した柵を指したものである。同年閏四月、義経は泰衡に攻められ自殺している。

「末の松山」では、塩釜の旅籠に泊った芭蕉が、「ひなびたる調子うち上て、枕ちかうかしまし」い「奥上るり」を聞くという一節がある。この奥浄瑠璃とは、古浄瑠璃やそれを模して作った浄瑠璃を仙台特有の曲節で語ったもので、『奥細道菅菰抄』（安永七年七七刊）には「今俗の仙台浄瑠璃といふものにて、多く義経奥州下りの事などを作りて語る也」と解説している。曲目には「尼公物語」「牛若東下り」「烏帽子折」などの判官物がある。芭蕉が「殊勝に覚らる」と書いているのも、それらの曲目を耳にしたからであろう。

「塩釜」には、塩釜神社に宝塔を寄進した藤原忠衡について、

神前に古き宝塔有。かねの戸びらの面に「文治三年和泉三郎奇進」と有。五百年来の俤、今目の前にうかびて、そゞろに珍し。

と記述している。義経とかかわりのある人物であるが、前稿でふれているので省略する。

「石巻」に歌枕として「袖のわたり」が出ている。三世素堂著『奥のほそ道解』（天明七年八七成）に「昔九郎判官義経、奥州下向ノ時、此渡りにて、舟賃の代りに、上着の片袖を給ふといふ。里人今に伝へて、其頃より袖の渡りと云々」と。土地の伝承を紹介している。『菅孤抄』には「あぶくま川の末也」とあり、名取郡にあったと思われる。芭蕉は、土地の伝承によったのであろう。「尾ぶちの牧・まのゝ萱はら」と続け、北上川の右岸の地としている。

さて、「与市」や「二人の嫁」からは、『平家物語』の「那須与一の事」「嗣信最期の事」が自然に連想されたであろう。「佐藤庄司が旧跡」に名の出ていた弁慶と義経の伝説は、室町時代の『義経記』に集大成されていた。そして、義経の功多くして報いられることのなかった生涯は、正保二年（一六四三）刊の『毛吹草』に収められている

世や花に判官贔屓春の風　　作者不知

に見る如く、「判官びいき」の心情を生み、一般的になっていた。

以上、個々の章は悲劇の武将源義経につながっており、「平泉」で「夏草や兵どもが夢の跡」に集約されるのである。バラバラに見える各章が、伏線によって一つに結びつく、これが『おくのほそ道』の新しみである。

一八

芭蕉は、『おくのほそ道』において、基本的には、日付を出してその日の出来事を記述するという日並の紀行文の形をとらなかった。しかし、

二か所だけ日付を用いたところがある。「日光」の「卯月朔日」と「羽黒」の「六月三日」である。その意図を考察しよう。

「卯月朔日」の場合、一つには、前章の「仏五左衛門」の冒頭の「卅日」に対応するためである。「三月三十日」ではなく、「卅日」と書いたのは、「旅立」の書出しに「弥生も末の七日」とあるため、わざわざ「三月」を付ける必要がなかったのである。さらにこの日付は、第二段の曽良の句「剃捨て黒髪山に衣更」に照応させるために必要であった。朔日は、それまでの綿入を脱いで裕に着替える衣更の日である。さらに、この二字には先に述べた如く、旅立の際の曽良の決意がこめられている。その意味からも「卯月朔日」は欠かせぬ日付であった。そして、日付が一日だけというのは不自然であるため、「仏五左衛門」に「卅日」が置かれたのである。以後、芭蕉は「何日」とする場合、必ず二日続けて出している。「松島」の瑞巌寺の「十一日」に続いて「石の巻」の「十二日」、「敦賀」の「十五日」に続く「種の浜」の「十六日」がそれである。

『おくのほそ道』は、三月末から八月まで約五か月に及ぶ長旅である。芭蕉は、時間の経過を日付に代って、季節の推移で具体的に表現している。

五月は、「佐藤庄司が旧跡」に、

寺に入て茶を乞へば、爰に義経の太刀・弁慶が笈をとゞめて什物とす。
笈も太刀も五月にかざれ帋幟

五月朔日の事也。

とある。「日光」と同じように、最初に「五月朔日」としてもよかったわけだが、そうすると、日付を出して、その日のことを記述する形がくり返されることになる。それを避けるための工夫であった。

六月は、「羽黒」の書出しに「六月三日、羽黒山に登る」とあって、四日、五日、八日と日付を出し、日並の紀行文のような形式をとっている。芭蕉にとって「羽黒」では、別当代会覚阿闍梨の厚遇とそれに対する謝意（三日・四日）、羽黒修験の縁起と絶えることのない修験行法への賞讃（五日）、月山・湯殿への順礼（八日）と書くべき事柄が多かったので、こういう形になった。

芭蕉は、紀行文について事実の記録では意味がないといい、特に印象深く心に残ったことを書くのであると述べている。この「羽黒」は『おくのほそ道』中、もっとも長文であり、それだけ心に強く残った場所であった。

その第一は、羽黒山権現（天台宗）の別当代会覚阿闍梨の心の籠った手厚いもてなしである。江戸中期の名古屋藩士人見弥右衛門によれば、俳諧師は、四民の外なる遊女・歌舞妓とともに「遊民食ひ潰し」とされている。一方、羽黒山権現は、出羽国鎮守としてのみならず陸奥・出羽両国鎮守として位置づけられ、かつ熊野と並ぶ全国有数の神として崇められていた。別当代は本来の別当東叡山寛永寺の貫主に代って一山を統括する人である。その方が南谷の紫苑寺に泊めて下さった。曽良は院（隠）居所と書いている。芭蕉は「憐愍の情こまやかにあるじせらる」と述べ、さ

らに「有難や雪をかほらす南谷」と感謝の挨拶をしている。これらの待遇は、大石田の高野一栄の紹介状の御陰と言えるのだが、芭蕉の人柄があってのことと思われる。四日、阿闍梨の本坊若王寺へ招かれて拝謁し、蕎麦切の御馳走になった。七日、月山より南谷に帰り、八日、阿闍梨の訪問があり、九日のお山成就の祝には飯・銘酒持参で出席された。十日、羽黒山を下る日、昼前若王寺で蕎麦切・茶・酒などを振舞われた上、十三日、逗留していた鶴ヶ岡から酒田へ船で下る直前、阿闍梨から発句に添えて旅行帳・浴衣二着が飛脚便で届けられた。芭蕉の感動は大きかったに違いない。

第二には、羽黒権現は「延喜式」（九二七年撰進）にもある古い神社で、文覚上人も修行した霊場であること。今も修験行法に励んでいる盛んな有様を「めで度御山と謂つべし」と記している。江戸中期の記録によると、山上に清僧寺三一院、山下に妻帯修験三三六坊があった。五百年前と変らずに光堂が残っていることに感動した芭蕉である。七五〇年余の伝統が今も守られていることに強い感銘を覚え五日の記述となった。

そして、峰入りの実践である。曽良の『旅日記』によれば、六月五日、昼まで断食して注連をかけ、羽黒山権現に参詣。六日、午後四時、月山に登拝して山小屋に一泊。七日、湯殿に下り、日が暮れてから南谷に帰った。九日、断食の後、昼にそうめんを食べ、お山成就の祝をしている。本来の修験者のように山中で十界修行はしなかったが、修験道のきびしい峰入り修行の一端は体験したわけである。

本文では、この入峰修行を細くは記述していない。「惣て、此山中の微細、行者の法式として他言する事を禁」じられていたからである。月山は、修験者が十種の艱難に耐え、あらゆる苦悩を克服して修行を修めおわる修験の名山である。芭蕉は、

雲霧山気の中に、氷雪を踏てのぼる事八里、更に日月行道の雲関に入かとあやしまれ（中略）、

と述べている。「雲霧山気」は、全く俗界から離れた世界に入ったとの感じを表現している。だからこそ、日月に届くかと思うほどの高みに達したのではという不思議な心境になったのである。「日没て月顕る」は、山名に応じている。

この霊場の雰囲気は、

谷の傍に鍛冶小屋と云有。此国の鍛冶、霊水を撰て、爰に潔斎して叙を打、終「月山」と銘を切て世に賞せらる。彼竜泉に釗を淬とかや。干将・莫耶のむかしをしたふ。

へとつながって行く。

さらに「三尺ばかりなる桜のつぼみ半ばひらけるあり」と記す。霊山なればこそ夏に咲く桜が見られたのである。

七月は、「越後路」の結び、

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天河

の二句で示されている。

江戸後期の国学者屋代弘賢の『風俗問状』によると、新潟では七月朔日から七日まで行事をする所があった。新発田ではこの間子供が松明をもって町の中を行きつ戻りつして走り廻ったり、源平人形を庭先の樹木に張った綱に下げる。栃尾町では、藁人形で大名揃という人形を列にして、家の前の左右に立てた木に縄を張って吊したことが報告されている。前日から七夕を迎える行事が行われているため、六日も日頃の夜とは違った雰囲気があった。それを詠んだのが「文月や」の句である。

佐渡は、「大罪朝敵」が島流しになっていた所である。それらの人々は、年に一度牽牛と織女が出合うという七夕の夜、親しい人たちと会う事の叶わぬ地にあって、どんな思いで天の河を眺めていたであろうかとの想いが「荒海や」の句にはある。庶民にとっては、文学・書道・裁縫の上達を願い、短冊を笹竹に結びつけて飾る祭である。芭蕉は、たまたま七夕の日に暗い歴史を持った佐渡を目前にした地点にたどり着いたことを、興味深く感じたと思う。そして、遙々と旅を続けて来たという感慨を抱いたのである。

この二星の出合は、「一振」の遊女とのめぐり合にもひびいて行く。このように旅情を深めている点で、単なる日付よりもはるかにまさっている。

一九

構成上の新しみとして、最後に前文との句の関わりを検討する。

芭蕉は、前文を受けた結びの句で章の主題を集約することを基本の型としている。以下二九章がそれである。

「序章」「旅立」「日光」（東照宮・裏見の滝）「那須」「黒羽」「雲巌寺」「殺生石・遊行柳」「白川の関」「須賀川」（後半）「しのぶの里」「佐藤庄司が旧跡」「笠島」「武隈」「宮城野」「松島」「平泉」（光堂）「尿前の関」「立石寺」「最上川」「羽黒」（四日）「一振」「那古の浦」「小松」（多太神社）「那谷」「山中」「全昌寺」「天竜寺」「敦賀」「大垣」

右の基本型をとらず、二句以上並記しているのは、次の各章である。

○　五句－「象潟」　○四句－「尾花沢」「羽黒」「金沢・小松」　○二句－「平泉」「酒田」「越後路」

五句を並記してある「象潟」については、すでに照応の項で取上げているため省略する。また、四句並記の「尾花沢」も、前稿の「尿前の関」との対比において論及しているから、ここでは再論しない。

「羽黒」では、文末に「坊に帰れば、阿闍梨の需に依て、三山順礼の句々短冊に書」とあって、

涼しさやほの三か月の羽黒山
雲の峰幾つ崩て月の山
語られぬ湯殿にぬらす袂かな
湯殿山銭ふむ道の泪かな　　曽良

の四句が並記してある。

「涼しさや」の句は、四日に芭蕉が詠んだ「有難や雪をかほらす南谷」に照応している。山腹に雪の残る南谷をかかえる羽黒山、その黒々とした山容は、夜に入って一層涼味を増し、杉木立の間からは、ちらっと三日月も見えるという景である。細い三日月との取合せが効果的である。

「雲の峰」は、昼間何度も湧き上っては崩れ、また立ち昇った雲も消え去り、月山の空高く月が澄んでいるの意である。前句の視線が近景から遠景に移動したのである。

「語られぬ」は、本文の「惣て、此山中の微細、行者の法式として他言する事を禁ず」に照応している。湯殿山神社の神体は、湯殿山の北側中腹、梵字川の谷の巨岩である。固い岩山の頂から温泉を噴出している。その神秘的な姿が有難く拝されて涙で袂を濡らすという句意である。

曽良の句は、湯殿山の参道には賽銭がばらまかれている。その拾う人もない銭を踏みつつ神域の尊さに涙を落すのであるの意。『奥細道菅菰抄』に「此山中の法にて、地へ落たるものを取事あたはず。故に道者の投擲せし金銀は、小石のごとく、銭は土砂にひとし、人其上を往来す。」と注解している。芭蕉の「語られぬ」が、湯殿山の神秘さを主題としているのに対し、この句は参道の有様をそのまま詠んでいる。いわば発句に対する脇として添えられたのである。

「平泉」でも同じ意図で二句が並記されている。芭蕉は、藤原氏三代の栄華がほとんど跡をとどめていない平泉を訪れて、人の世の栄枯盛衰を実感して、絶唱「夏草や兵どもが夢の跡」と詠じた。曽良は、義経の忠臣兼房が主の自刃を見届けた後、屋敷に火を放ち敵の武将を左脇に挟んで炎の中に身を投じた奪戦ぶりを「卯の花に兼房見ゆる白毛かな」と吟じた。この句は、「夏草や」の句の中にあって詠まれていない義経の悲劇的な最期を、兼房を通して彷彿とさせている。まさに脇句の働きである。

「酒田」では、次の二句がある。

川舟に乗て、酒田の湊に下る。淵庵不玉と云医師の許を宿とす。
あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

暑き日を海にいれたり最上川

「あつみ山や」の句は、南の温海山から北の吹浦まで広々とした夕方の景を一望に収める雄大な夕涼みであることよ、と土地柄をほめ不玉に対して挨拶したのである。

「暑き日を」は、悠然と流れる最上川が、暑い一日を海に流しこんでしまったようだ。この河口の辺はすっかり涼しくなった、の意。この句は、「最上川」の、

最上川は、みちのくより出て、山形を水上とす。ごてん・はやぶさなど云おそろしき難所有。板敷山の北を流て、果は酒田の海に入。

に照応している。

日本海に面した酒田港の景観を大きく詠んだ右の二句は、前章「羽黒」の「山」に「海」を対比させた構成となっている。

「種の浜」では、

浜はわづかなる海士の小家にて、侘しき法花寺あり。爰に茶を飲、酒をあたゝめて、夕ぐれのさびしさ、感に堪たり。

寂しさや須磨にかちたる浜の秋

浪の間や小貝にまじる萩の塵

とある。「寂しさや」の句、漁師の貧しい小屋しか見当らない現実の種の浜の寂しさは、『源氏物語』による須磨に勝るとの実感を、句合の判詞「かち」を使って、はっきりと詠じている。故事来歴によって前句に付けるべきではないとする「かるみ」の反映である。

「浪の間や」は、脇の格で萩の花びらとまじる小貝は、西行の「潮染むるますほの小貝拾ふとて色の浜とは言ふにやあるらむ」（山家集）に対する挨拶である。

さて、二句並記の場合、「平泉」「酒田」「種の浜」は、一句目はいずれも前文を受けた句であるから厳密には基本型と見てよい。二句目は、発句に対する脇の格で添えられたものである。

芭蕉は、長文の後に短文を配する構成をとっている。そして、二句並記はその短文を補うという意図がある。「尾花沢」「酒田」「越後路」さらに「種の浜」がそれに当る。

さらに、句の配置については、単調を破るため、「日光」の曽良を紹介する一節では、冒頭に「剃捨て黒髪山に衣更　曽良」を出し、「須賀川」では、等躬の「白河の関では、どういう句をお詠みになりましたか」の問に「風流の初やおくの田植うた」と答える形にしている。また、「全昌寺」に泊った翌朝、旅立つ芭蕉に僧が是非と句を望むので「折節庭中の柳散れば、庭掃て出ばや寺に散柳　とりあへぬさまして、草鞋ながら書捨

つ」と、旅中の一場面として句が示されている。同じことのくり返しにならぬように、句の出し方に芭蕉がいかに心を砕いたかがよくわかる。

以上で構成についての考察を終了する。

二〇

ここからは、用語の面から新しみの検討に入る。まず、芭蕉の造り出した新造語を、次に引用する。

「そゞろ神」「ひなの家」（序章）「小姫」（那須）「小里」（しのぶの里）「風流のしれ者」（宮城野）「彩椽」（塩釜）「夢の跡」（平泉）「反脇差」（尿前の関）「飼屋」（尾花沢）「芦角一声」（最上川）「雲関」（羽黒）「方寸を責む」（象潟）「平士」（小松）「小堂」（那谷）「数景」（汐越の松）「夜参」（敦賀）

以上の一六例について、芭蕉がそれらの語を造り出した理由を考察しよう。

○　そゞろ神

序章に

春立る霞の空に、白川の関こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取もの手につかず（後略）

とある。「そゞろ神」は「道祖神」に対比する神として登場させている。旅に出たいという想いに駆られて、居ても立てもいられなくなった心の状態を対句で表現したのである。芭蕉には、腹痛と痔疾があった。どちらも寒さが大敵である。『おくのほそ道』の旅立は、三月節句過ぎと予定されていたが、まだ寒気があるという白河からの情報で延期されていた。春霞が立ち暖気がもどってくると、自分でも説明のつかない漂泊の思いが芭蕉の心をつき動かしたのである。その旅に取り憑かれた心境は、人の心を落着かなくさせる「そゞろ神」が、取り付いたため、としか言いようがなかったのである。

○　ひなの家

草の戸も住替る代ぞひなの家

「ひなの家」は、雛人形が飾ってある家のことである。雛を飾る「雛祭」は、平安時代の「ひいな遊び」と上巳の祓の行事が結びついたもので、宮廷行事の三月四日は、江戸時代に入って三月三日に定着し、庶民の間で盛大に行われるようになった。幕府はその華美を禁止する布告を寛文八年（一六六八）に出している。それにもかかわらず、貞享年間（一六八四－一六八七）から人形を売る店が多かった堺町・葺屋町界隈は俗に人形町と呼ばれていた。当初人形の多くは紙製で立雛のような形であったが、元禄年間（一六八八－一七〇四）には今の衣裳雛と同じ坐り雛が流行す

るようになった。

「ひなの家」は、その流行を素材にとり上げたもので、僧体の芭蕉が住んでいた草庵が、娘のいる賑やかな家に様変りしたことを端的に表現し、効果的である。さらに、人の世の本質は無常であるとする冒頭の文に照応して、主題を明確にしている。

○　小姫

「那須」の章では、草刈おのこに馬を借りると、子供が二人後を追ってくる。

独は小姫にて、名を「かさね」と云。聞なれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重撫子の名成べし　　曽良

「小姫」は、少女をより可愛らしく感じさせるための造語である。また、「聞きなれぬ名のやさしかりければ」との照応から見て、小娘や少女では、いとけない可愛いらしさが出ない。芭蕉のことばに対する細かな感覚がすばらしい。はじめに「ちいさき者ふたり」とあり、小娘・少女では同じことのくり返しになってしまう。「かさね」にも「小姫」がよく似合っている。

○　小里

あくれば、しのぶもぢ摺の石を尋て、忍ぶのさとに行。遙山陰の小里に石半土に埋てあり。

右の『おくのほそ道』のほか、文字摺石についての俳文もある。それには所在地を「忍ぶの郡しのぶの里とかや」「しのぶもぢずりの石ハ、みちのくふくしまの駅にありて」と書き、さらに「福しまの駅より東一里計、山口といふところに有」と細かく記述している場合もある。芭蕉は、その紀行文観で、事実通りに書いても無意味であると述べている。ここでも村名などをあげる意図は全くなかった。

「しのぶの里」の主題は、結びに

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

とあるように、往時、この地方で産出していた信夫摺の染め方を、是非この目で確かめたいという芭蕉の強いあこがれである。

そもそも、この「信夫摺」が歌枕となったのは、源融が、

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱むと思ふ我ならなくに　（古今集・恋四）

と詠じたことによる。さらにこの歌を本歌とした『伊勢物語』第一段の

春日野の若紫のすり衣しのぶの乱れ限り知られず

によって、「信夫摺」が信夫地方の名産として世に広まったのである。

芭蕉は、よく使われる「信夫の里」ではなく「忍ぶのさと」と書き、直接恋の気分につながる表現をとっている。それに続く文であるから、「山口」という地名より「山陰の小里」の方が、ひっそりとした気分にかなうはずである。

○　風流のしれもの

「宮城野」で、芭蕉は画工加右衛門を「風流のしれもの」と評してその人柄を称えている。風雅なことに徹底する者の意である。

その徹底ぶりの第一に「年比さだかならぬ名どころを考置侍ればとて、一日案内す」と書いている。長年その所在地のはっきりしなかった歌枕を調査していたというのである。

この歌枕の選定は、加右衛門の師大淀三千風が行なったものであった。

三千風は、伊勢の人で、寛文九年（一六六九）から天和三年（一六八三）まで仙台に滞在、多くの弟子を指導し、延宝七年（一六七九）には、二千八百句の矢数俳諧を興行した。貞享四年（一六八七）の春、亀岡八幡宮で「二十八景品定」（元禄三年一六九〇刊『日本行脚文集』に所収）と称して、仙台領内の二十八か所の歌枕を選び、その景を詠んだ句を一枚の檜板に書いて奉納した。この俳句額奉納の施主が高弟である加之（加右衛門）であった。二十八景には芭蕉の訪れた歌枕が網羅されている。芭蕉は、歌枕の整備が三千風によるものであることは承知していたのだが、「宮城野」の主題が加右衛門の「しれもの」振りにあることから、あえて選定者を加右衛門と書いたのである。

彼は日の暮れるまで歌枕を案内し、松島・塩釜の絵図を画いてくれ、さらに草鞋二足を餞とした。絵図は、画工であるから当然の贈物といえるが、草鞋二足の餞が芭蕉を大いに感動させた。芭蕉は、かねがね自分の足に合った草鞋の入手をささやかな願いとしていた。加右衛門は、芭蕉の足の寸法に合うものを贈ったに違いない。しかも、蝮や毒虫の嫌う紺の染緒がつけてあった。旅人芭蕉が最も必要としているものは何か、十分に心得た贈物であった。その細かい心配りが、「風流のしれもの」と書かしめたのである。

○　彩椽

早朝、塩がまの明神に詣。国守再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階九仞に重り、朝日あけの玉がきをかゝやかす。

「椽」はたるき。棟から軒へわたす材で屋根の裏板を支えるものである。実際には、このたるきに色彩を施すことはない。

慶長六年（一六〇一）、仙台に入府した伊達政宗は、紀州・城州・泉州から名工を集め、中央に劣らない文化を興そうと仙台城・大崎八幡神社・国分寺薬師堂さらに松島五大堂・瑞巌寺・東照宮を建築し、塩釜明神については慶長一二年（一六〇七）に大造営を行った。四代綱宗も万治二年（一六五九）から寛文三年（一六六三）にかけ、引継いで造営をしている。その豪壮で華麗な桃山様式の装飾を「彩椽」と表現したのである。

「塩釜」の主題は、「平泉」の伏線ともなっている勇義忠孝の士藤原忠衡である。そのため、芭蕉には、社殿の漆塗、彫刻さらに彩色に見られる

壮麗を細かに描写する意図はなく、それらを、この彩椽で代表させたのである。

○　夢の跡

三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を残す。先高館にのぼれば、北上川は南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偖も義臣すぐって此城にこもり、功名一時の叢となる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠打敷て、時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房みゆる白毛かな　　曽良

「夢の跡」は、前文中の多くのことばに照応している。

まず、「一睡」である。これは「一炊の夢」のこと。貧しい少年盧生が、趙の都、邯鄲で道士呂翁から栄華が思い通りになるという枕を借り、富貴をきわめた五十余年の夢を見る。覚めてみると炊きかけの粟がまだ煮えないほどの短い間であったとの故事。「夢の跡」に「一睡」がふさわしいのは説明の要もないであろう。

百年近く繁栄した平泉藤原氏三代の廃墟に立ったとき、人の世の栄枯盛衰のはかなさのたとえとされる「邯鄲の夢枕」が、まっ先に芭蕉の脳裏に浮んだのは自然なことである。田野の中を進み高館に登ると、義経・弁慶らの悲壮な戦を思い浮べずにはいられない。しかし、芭蕉は物語に描かれた最後の場面は省略し、ただ「功名一時の叢となる」とのみ記す。「叢」は下の「草青みたり」に続き、結びの「夏草や」の句につながる。そして、「夏草」の「夏」が「夢」にかかり、夏の短夜の夢であるから、「夢」のはかなさが一層強く訴えてくる。藤原氏三代の栄耀と義経の功名は、全く跡をとどめていない。そのむなしさが胸を打つのである。「夢の跡」は、この章の主題である人間の営みのはかなさを一語で表現して余すところがない。あらためて最適の言葉を創造する芭蕉の表現力には脱帽するのみである。

○　反脇差

あるじの云、是より出羽の国に、大山を隔て、道さだかならざれば、道しるべの人を頼て越ゆべきよしを申。さらばと云て、人を頼侍れば、究境の若者、反脇指をよこたえ、樫の杖を携て、我〳〵が先に立て行。けふこそ必あやうきめにもあふべき日なれと、辛き思ひをなして後について行。

右の文は、「尿前の関」の第二段の書出しである。この章の主題は、旅の難儀である。第一段では、尿前の関守に不審に思われて取調べを受け、

大山越え（中山越出羽道）で日が暮れ封人の家に泊めてもらったが、悪天候のため三日間逗留したことが書かれている。

さて、第二段では主人の勧めによって道案内人を雇って大山越えをすることになった。第一段に続き、ここでも大山と言っている。尿前の関から国境の堺田までは、小深沢・大深沢などの谷を何度も上り下りする難路であった。堺田から尾花沢へ出る山刀伐峠越えは、明治末期まで人通りがほとんどなく、左右からおおいかぶさるような木々の下道を行き、ジクザクの崖道を上ったという。この二か所の峠越えの艱難を「大山」に象徴したのである。

道案内の男が腰に差した「反脇差」が、まっ先に芭蕉の目を引きつけた。徳川幕府は、儀礼用・旅の護身用として脇差のみの使用を庶民に許し、大小二本の刀を指す武士と区別した。「反脇差」については、もともと刀身にそりのある脇差とそりを返した脇差の二つの解釈ができる。後者は、刀の刃を下にして、鞘尻を高くそりを返し、すぐにでも抜けるように身構えて腰に指している意である。道案内の厳重な身支度を考えると、後者に解すべきであろう。蕪村も同様に解したことは、『奥の細道画巻』に描かれた案内人の姿を見れば明らかである。

若者のものものしい格好は、芭蕉を緊張させ今日こそは危険な目に合うに違いないとおびえさせたのである。「反脇差」の一語の効果は誠に大きい。

（未完）